

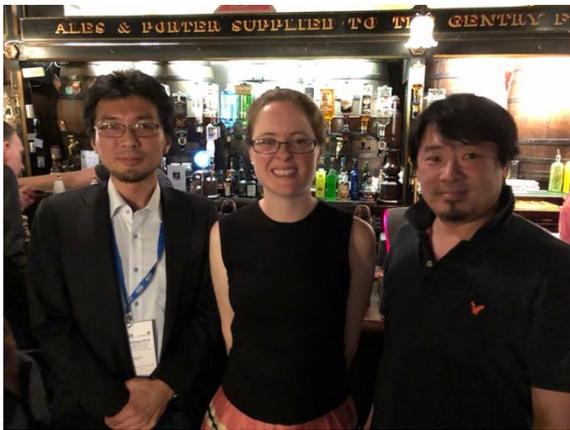
この度、日英病理学会国際交流事業の一環として、Harrogateにて開催された英国病理学会(Leedspathology 2019, 7/2-4, 2019)に参加させて頂きました。Harrogateはヨークシャー州にある高級街で、アンティーク調の街並みと広大な自然や牧場の残る落ち着いた雰囲気のある街でした。



学術集会は中心街にある Harrogate Convention Centre にて開催されました。会の規模は日本病理学会総会と比較しても小さく、ポスター発表では English tea を片手に和やかな雰囲気で discussion していたのが印象的でした。シンポジウムは形態像から遺伝子・分子異常、その臨床的な意義から応用に至るまで幅広く網羅するセッションが組まれていました。加えて、若手病理医に対しての実践的な病理診断の講習会が多数開催されていたことも非常に印象深かったです。私は”Advances in Proteins”のシンポジウムで大腸癌における ADAM28 の発現と機能に関する研究成果の発表の機会を頂きました。座長の Prof. Quirke、Dr. Richman をはじめ、会場の先生方から様々な質問や激励を頂きました。また学会に先立って行われた National Academic Trainee Network Meeting というイギリス、オランダ、ドイツ等の若手病理医が合同で主催する会合に参加する機会を頂きました。各国の若手病理医がそれぞれ専門医を取得するまでのプログラムの紹介、各国のプログラムの特徴やメリット・デメリット等のディスカッション、参加者の研究テーマの short presentation、困難な状況における mentality の持ち方・乗り切るための mindset に関する interactive workshop、などなど一日盛りだくさんのイベントでしたが、日本では経験できない貴重な機会でした。また各国の代表者が精力的に活動に参画し、若手からのフィードバックを通じて各国の病理学会を盛り上げようと努める姿に感銘を受けました。



滞在中は学会の主催者でもあった Prof. Quirke や Dr. Caroline に大変お世話になりました。学会参加や施設見学、Hrrogate で有名なレストランでのディナー、パブでの交流会など、熱烈な歓待と細やかな心遣いを頂きました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。Dr. Caroline にはイギリスにおけるデジタルパソロジーに関する現状を見せて頂くことが出来、これからの病理診断業務のあり方に関して考える貴重な機会となりました。また Dr. Caroline は大規模グラントを獲得して、数万検体の便検体の細菌叢に焦点を当てた大腸癌スクリーニング系の確立に向けたプロジェクトを主導しており、彼女の発表や個人的なディスカッションを通じて大いに刺激を受けました。



最後になりましたが、このような大変貴重な機会を与えて下さいました日本病理学会、英国病理学会の関係者の皆様方に心より御礼申し上げます。また平素より熱心にご指導下さっている安井 弥教授にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。今後も病理診断、病理学的研究に邁進し、自己研鑽に努める所存です。今後とも御指導御鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。